

NHKスペシャル
21世紀の潮流「アフリカ ゼロ年」
(平成17年7月 4回シリーズ 総合・夜9時)

アフリカは決して遠くない。貧困、テロ、内戦など、21世紀の不安定要素のすべてが今、アフリカに集約している。超大国アメリカは、中東への戦略後にアフリカを見据え、7月ロンドンで開かれる先進国首脳会議は、その最重要課題に「アフリカ」を掲げた。

豊かなものは、ますます豊かに。貧しいものは、さらに貧しく。グローバル化の負の側面を、アフリカは一身に背負い込んで来た。多くの国で、人間の生存条件の基本となる、寿命、所得、医療などの指標が、悪化の一途を辿り、貧困がテロや内戦を生むマイナスのスパイラルは、アフリカが、「ゼロ」からのスタート地点に立つことさえ許さない。

今回のシリーズでは、アフリカの「負の連鎖」を断ち切る手立てはあるのか、という視点から、21世紀初頭のアフリカを記録する。

第1回「ジェノサイドを止めるのは誰か～スーダン・ダルフール紛争～」

7月9日(土) 総合・後9:00～9:52

「今世紀最悪の人権侵害」と国連のアナン事務総長が警告したスーダン・ダルフール紛争。相次ぐ虐殺は防げるか。日本を含む国際社会の役割を考える。

第2回「貧困に引き裂くのは誰か～ナイジェリア・石油争奪戦～」

7月17日(日) 総合・後9:00～9:52

大国の石油利権の争奪戦から混乱を極めるナイジェリア。反政府ゲリラと戦いながら、腐敗なき民主化を目指すオバサンジョ大統領の新しい国造りを追う。

第3回「子ども兵を生んだのは誰か～モザンビーク～」

7月23日(土) 総合・後9:00～9:52

誘拐され、麻薬を打たれ、戦場に立つ子ども兵が、今アフリカの紛争地域に広がっている。子ども兵はなぜ生まれたか、モザンビークの元子ども兵を取材。

第4回「40万人を死なせたのは誰か～南アフリカ・エイズ薬と命の値段～」

7月24日(日) 総合・後9:00～9:52

エイズ薬が、特許など貿易ルールに阻まれて行き届かず、およそ10年で寿命が15歳短くなった南アフリカ。今も続く特許か命かの攻防を、南アで描く。

(放送時間・タイトルは変更の可能性があります)

～ 各回の内容 ～

第1回「ジェノサイドを止めるのは誰か～スーダン・ダルフル紛争～」

7月9日(土) 総合・後9:00～9:52

「今世紀最悪の人権侵害」といわれるダルフルの虐殺。それは、なぜ起き、なぜ止められなかったのか。シリーズ第1回は、内戦に苛まれつづけるアフリカの象徴的な国・スーダンにスポットをあてる。

今年1月、20年続いたスーダンの内戦が終結。北部に拠点を持つ政府軍と南部の反政府勢力は、歴史的な和平合意によって、共同で新しい政府をつくり、争いの種だった石油資源も共有することになった。スーダンは豊かさに向かって、やっとゼロからのスタートを切ることができるはずだった。

ところがその直後、ダルフルの虐殺は起きた。きっかけは、南北の和平合意に傍らで焦りを募らせた西部・ダルフル地方の黒人住民たちが、平等な扱いをもとめて空港施設を攻撃した事だった。その直後から「虐殺」は始まった。ジャンジャウイード(武器をもった馬にのる人という意味)と呼ばれる謎のアラブ系民兵が1000近いダルフルの黒人部族の村を襲撃、家を焼き払い、殺戮を繰り返した。犠牲者はこれまで、10万を超えるといわれている。

「大量虐殺」という事態に、国連など国際社会の対応が遅れるなかで、立ち上がったのがAU・アフリカ連合である。治安を回復し、住民を保護するために、ナイジェリア・ルワンダ軍を中心に3,000人をダルフルに展開、紛争の実態を調査しはじめている。

果たして、アフリカの手でアフリカを救うことができるのか。94年、民族の争いから80万の命が奪われた「ルワンダの悲劇」から10年、国際社会は何を学んだのか、私たちは何ができるのか、また、何をしてはならないのか。AU・アフリカ連合、初めての平和維持活動を追いながら、考えていく。

第2回「貧困に引き裂くのは誰か～ナイジェリア・石油争奪戦～」

7月17日(日) 総合・後9:00～9:52

アフリカの多くの国が、原油、天然ガス、鉱物など豊かな地下資源をもちながら、貧困にあえいでいる。アフリカ最大の産油国ナイジェリアは、莫大なオイルマネーを得ても国民の暮らしは豊かにならず、逆に300億ドルもの累積債務を抱えてしまった。第2回は、なぜ豊かなはずの国が貧しさから抜け出せないのか、アフリカ貧困の構造をナイジェリアで探る。

ニジェール川河口のナイジェリア南部デルタ地帯で、去年から少数民族イジョ族の民兵が石油施設の占拠や原油略奪を繰り返している。リーダーはアサリ・ドクボ。「石油は自分たちのものだ」と主張し、貧しい村人たちの熱狂的な支持者を増やしている。その行動は世界の原油高騰の引き金にもなった。

AU・アフリカ連合の議長を務めるアフリカ大陸有数のリーダー・ナイジェリア大統領オバサンジョ。アサリによる争乱を押さえこむ一方で、貧しさこそ紛争の根だと考え、貧困解消のための戦いを始めた。その作戦は、腐敗・汚職の根絶によるオイルマネーの透明化。専門の政府捜査機関を立ち上げた。

調査によれば、ナイジェリアがこれまで石油輸出で得た金額3000億ドルの大半が汚職で消えた。背景には、あらゆる手段で資源を入手しようとするアメリカ石油メジャーや多国籍企業の戦略がある。

アサリとオバサンジョ。共に貧困脱却をめざしながら別な方向に向かう2人のリーダー。巨額の石油マネーが紛争を呼び、紛争が貧困を、貧困が次の紛争を生んだ歴史の教訓を生かすことはできるか。

今、ナイジェリア沖のギニア湾では、世界有数の海底油田が発見され、さらに海外企業が群がり集まる。21世紀のアフリカは、欧米の資源戦略がすすむなかで、豊かな資源をアフリカ自身の豊かさに繋げることは出来るか。ナイジェリアの苦闘を追う。

第3回「子ども兵を生んだのは誰か～モザンビーク～」

7月23日(土) 総合・後9:00～9:52

21世紀になっても、アフリカで相次ぐ内戦や地域紛争。その戦場では、子どもたちが銃をもち、最前線で闘うことを強いられている。子ども兵の多くは、武装組織によって誘拐され、麻薬と暴力によって支配される。誘拐がたやすく、洗脳し易く、死ねば新たに補充すれば良い、いわば戦争の道具として扱われているのだ。

アフリカの子ども兵を、世界が初めて知り、大きな問題としてクローズアップされたのは、モザンビーク内戦(1977～1992)だった。NHKは、1990年、当時8歳だったフラニスという名前の子どもの兵を取材している。

今回、モザンビークを再訪してみると、そのフラニスは、去年、事故死していた。そして、フラニスは、23歳で亡くなるまで、戦場の記憶に苦しみ続けていた事が分かってきた。子ども兵という過酷な体験は、その未来にも暗い影を落とす事になる。

なぜ「子ども兵」は生まれたのか。モザンビーク内戦の歴史的な背景をさぐっていくと、当時、アパルトヘイト体制を維持しようとしていた隣国の南アフリカ、ローデシアの思惑や、東西の冷戦など、大きな構造が複雑に絡み合う中で、子ども兵が生み出されてきたことが浮かび上がってくる。

番組は、かつて子ども兵にされた者たちの声に耳を傾けながら、国際社会と子ども兵との関係、それを生み出した責任について考えていく。

第4回「40万人を死なせたのは誰か～南アフリカ・エイズ薬と命の値段～」

7月24日(日) 総合・後9:00～9:52

10年前の画期的な治療薬の登場で、先進国では、すでに不治の病とは言えなくなったエイズ。一方、途上国では、アフリカ・東南アジアを中心に患者数が激増し、世界の南アフリカでは、年間およそ40万人が死亡している。

病院の設備、医師、看護師の不足。さらにこの格差を決定づけているのが、新しいエイズ薬を使う際、多国籍の製薬メーカーに支払わねばならない高い特許料、いわゆる知的所有権の問題である。WTO(世界貿易機構)は、2000年、それまで先進国を中心に28か国が合意していた知的所有権の保護を、一気に148か国に拡大した。そのため、南アフリカを含む途上国では、自由貿易の恩恵を得ると同時に、先進国の製薬メーカーの薬を、成分や製法を真似て安く作ることが難しくなったのである。また、世界の経済力を背景に、アメリカは途上国に対し、二国間の貿易交渉の場で、WTOよりも厳しい知的所有権の保護を求めるようになっている。

南アは、530万人の患者を抱え、緊急に治療が必要な者だけでも50万と言われるが、薬が行き届いているのは、5万人に過ぎない。南ア政府は、予算を組み、公立病院でのエイズ薬の無料配布などを実施し始めているが、状況を大幅に改善するまでには至らない。

こうした中、さらに深刻な事態が進行し始めた。グローバル化する世界にあって、英語圏に属する南アで、より良い待遇を求めて、医師、看護師が海外へと流出し始めたのだ。また、南アでは、91年のアパルトヘイト廃止以降、経済封鎖が解かれたが、ここ数年、中国などの安い外国製品が流入。国内の繊維産業、製造業が不振に陥っている。失業率は、30%を超え、新たな貧困は、新たなエイズの病巣となっていく。

番組では、自由貿易の拡大と同時に進む、知的所有権保護の世界的な流れの中で、救われることの難しくなっている貧しい人々の命を見つめる。